

前年度に論文を推薦した土田さんはゼミに入った時点から進学希望だったので、研究者の卵のデビュー論文としてのレベルが要求される一方で、学生生活は勉強優先であり、作成に時間をたっぷり使うこともできた。しかし、今年の茂内さんの場合は、かなり状況が異なっていた。社会生活への第一歩を踏みするための就職活動（就活）が優先だったからである。

指導教員である私の計画性の欠如によるものであるが、ほとんど卒論作成に向けての予備作業をしないうちに、三年生の秋、就活生活に突入してしまった（現在、その経験を活かしつつある）。就活は希望する就職先から内定をもらうまで継続される。企業情報を調べたり、エントリーシートを作成したり、説明会らや面接やら採用試験準備やらで、ゼミは二の次（つぎ）、三の次にならざるをえない。「就活がいつ終わるのかわからないけれど、どんなに遅くても四年生秋までには決まるだろう」という曖昧な見通しの中で、就活を励ますだけのゼミになってしまった。私は彼女のことを体力的にも精神的にもタフな頼もしい存在だと感じつつ見守っていた。

就活が終わったのが7月下旬。それからようやく卒論作成にとりかかった。かなり遅い方だろう。夏休みにはテーマ関連の本をたくさん読んでくるよう指示した。

三年次以来の歴史教科書の記述への関心を持続していたものの、なかなかテーマを絞ることができなかった。時あたかも日韓・日中関係の悪化が報道され、歴史認識、ひいては歴史教科書問題が注目の的だった。そういった時事的な問題を扱うことも不可能ではないが、日々大量生産される情報の洪水の中で卒業論文をまとめるのは難しい。すでに十分な時間が経っているものを利用して、着実に作業を進めていくようなテーマを選ぶ方がよいのではないかとアドバイスした。

その結果として彼女が選んだのが、このテーマである。確定したのは秋もかなり深まってからであった。幸いにも戦前の主な教科書を収めた『日本教科書大系』全巻が地元の酒田市立図書館に揃っており、しかも貸出可能だった。資料集めのために遠方に泊まりがけで出かける必要がない。

小学生用の教科書とは言っても、文体や文字が古いので、慣れない人には読みにくい文章である。しかし中身はとてもおもしろい。ゼミの一年目で旧字体や旧仮名遣いに慣れる練習をしていたのが役立ったようだ。

2、3カ月でいったいどこまでやれるのだろうか、と私は案じていたのだが、彼女は就活で見せた体力的精神的なたくましさを、今回は卒論作成の過程で見せてくれた。歴史の教科書では実際にどのような記述がなされていたかを、復刻版ではあるが、生の資料を使い、明らかにしていくという、非常に根気が必要な作業を続けた。教科書を読んで、メモをして、考えて、という毎日が続いたようである。毎日どれくらいの時間をかけたのだろうか。時々会う私には、学生生活の最後の時を卒論に集中することで燃えているように見えた。一年次に履修した「日本教育史」の講義で聞いたはずの「国定教科書」の基礎知識さえ記憶に残っていなかった段階から、制度の概要を把握した上で、内容を浮かび上がらせるところまで到達した。

私が卒業論文集に推薦したのは、一つには、彼女の論文が、「何を明らかにしたいのか、このように研究した結果として何がわかったか」という基本的な形をなし、かつ、卒業論文が求められる程度のレベルまで達していると判断したからであるが、もう一つには、短い期間で集中して取り組めばここまでできるという好事例になるのではないかと考えたからである。ただしこのやり方は、体の弱い学生さんにはお勧めできない。

最終段階で、ゼミの先輩である大学院生の土田さんが、まったくもって親切にも、後輩の論文に赤ペンでチェックを入れてくれた。正直言って仕事を助けてもらえてありがたかった。また、研究職を志す彼にとってもよい勉強になるだろうし、ゼミの先輩後輩関係としても好ましいことだろう。原稿を前に真剣に議論をする二人の姿を見られた私は幸せである。

最後になるが、この論文を3月7日に逝去された西野廣祥先生に見ていただきたかった。公益大指圧部の創設者である西野先生は、指圧部メンバーの茂内さんを本当に大切に思っていた。彼女は頑張りましたよ、とお伝えしたい。